

コロンブスと食人伝説カニバリズム

Columbus and Cannibalism Rhetoric

富 田 晃*
Akira TOMITA*

要 旨

人が人を食べる習俗をカニバリズムという。「獐猛野蛮の極み」といったイメージをもつこの言葉は、コロンブスによってスペインに報告され、その後、人肉を食らう裸族の想像画をともないながらヨーロッパ世界に広がっていった。「新世界」を「発見」したコロンブスは、まだ見ぬ異民族に対し、マルコ・ポーロによるアジアの話や、ギリシャ神話といった自分がもっている知識を総動員して「人食い人種カニバル」を想像した。それは、コロンブスが、自らの業績を輝かせ、野蛮な人々にキリスト教を伝える義務感を、キリスト教世界の人々に与えるためのレトリックだった。

人が人を食べる習俗をカニバリズムという。「獐猛野蛮の極み」といったイメージをもつこの言葉は、コロンブスによってスペインに報告され、その後、人肉を食らう裸族の想像画をともないながらヨーロッパ世界に広がっていった。そして、このカニバリズムの語源は、カリブ海域の先住民族のカリブ人にある。カリブ人は、本当に人を食べていたのだろうか。少なくとも、ヨーロッパ人と新世界の人々との接触が始まった16世紀前後を除けば、カリブ人の末裔であるガリフナを含め、セント・ヴィンセント島やドミニカ島に残るカリブ人の末裔、さらには広くは南北アメリカのどの民族においても、そうした食人の習俗の報告はない。

「人食い人種カニバル」の初出はコロンブス、第一回航海の日誌にある。コロンブスの航海の最大の目的は、マルコ・ポーロによって伝えられた黄金の島国ジパングに行くことであった。コロンブスは、「発見の日」(1492年10月12日)、幸運にもその場にいたアラワク人と友好関係を築くことができた。しかしその島は貧しく、そこがジパングではないと悟ると、そこをインドの一部であると思うことにした。コロンブスはアラワク人を水先案内人としながら航海をつづけた。コロンブスの頭の中での地図では、インドの横に中国やモンゴルがあり、その東にモルッカ諸島があり、さらに東にジパングがあった。コロンブスが2番目に着いた

陸地(キューバ島)は大きく、そこが中国ではないかと思った。そして、さらに東にいき次の島に着いた。下記は、1492年11月23日、イスパニョーラ島北西沖でのコロンブスの航海誌である。

この岬におおいかぶさるようにして別の陸地、でなければ岬があり同じように東へ延びていた。連れていたインディオたちはこの陸地をボイオと呼んでいた。彼らはこの陸地はとても大きく、額に一つだけ目を持つ人間やカニバルと呼ばれる人間がいると話した。彼らはこのカニバルにひどく脅えていた。(提督は)その方向へ向かうのを見ると、食べられてしまうとばかりに口がきけなくなり、彼らはしっかりと武装していると話したと述べている。提督は彼らの話にはそれなりに真実味があると信じ、彼らが武装しているということは彼らが理性を具えた人間であるということであり、彼らに捕えられた人間が自分たちの土地に帰ってこないのを見て、彼らに食べられたと言うのであろうと述べている。¹

アラワク人たちは、島を指して、「額に一つだけ目を持つ人間やカニバルと呼ばれる人間がいる」という。それをコロンブスはマルコ・ポーロが伝えるモンゴル人「武装をした理性のある人」だと思うことにしたのである。ただし、コロンブス一行とアラワク人との会話は、身振り手振りによるつたないものであったはずだ。そして「一つ目」や「人食い人種」はギリ

* 弘前大学教育学部美術教育講座
Department of Art Education, Faculty of Education, Hirosaki University

シャ神話の典型的な怪物像である。つまり、コロンブスは、アラワク人とのつたない会話をもとに、マルコ・ポーロによるアジアの話や、ギリシャ神話といった自分がもっている知識を総動員して「人食い人種カニバル」を想像したのだ。

第一回航海から戻ったコロンブスはイサベル女王への報告を終えると、スペインの高官たちに書簡を送った。それらは、島々での出来事や所感をつづったもので、己の勇気と業績を輝かせ、次の航海への協力を得るための宣伝文であった。例えば、

インディアスの入口にある二番目のカリブの島には、どの島の住民もとても獐猛とみなす、人の肉を食べる人間が住んでいます。彼らは多数のカヌーを擁し、これにのってインディアスのすべての島をめぐり、手当たり次第に盗み、略奪しています。ⁱⁱ
「アラゴン王国糧食書記ルイス・デサンタンヘル宛のコロンブスの書簡」

この書簡は、大西洋を渡る帰りの航海で記されたものであるが、コロンブスは、この段階では、自分が到達したところは、インドのどこかではろうが、中国やモンゴルではないことは既に悟っていた。そして、食人習俗としてのカニバルと、諸島名および民族名としてのカリブを混ぜこぜに使いながら、未知の地に住むであろう人々についての想像を語るのだった。それは、野蛮なる彼らにキリスト教を伝える義務感を、読み手であるキリスト教世界の人々に与えるためのレトリックであった。

コロンブスの思惑どおり、これらの書簡は、ヨーロッパで大反響を呼んだ。短い期間にラテン語、ドイツ語に訳されグーテンベルグが発明した印刷技術により出版されヨーロッパ世界の人々に読まれることになった。こうして第一次航海を終えたコロンブスは、自らの希望通り英雄として本国に迎えられ、次の航海に対し多大な支援を獲得したのだった。

次のコロンブスの第二次航海では、実際にカリブ人が住む小アンティル諸島に到着した。この航海には、コロンブスが流布した情報が、どれほど正しいかを検証するためのスペイン王室直属の公証人が同行した。しかし、この公証人は、客観性よりも、コロンブスと利益を共にする道を選ぶのだった。そして、「シバオ島（ジパング）をみつけた。金を採掘する体制さえ整えれば、スペイン王は世界で最も富み栄える裕福な国

王になるであろう」と報告する始末であった。カリブ人については、現代人が読めば明らかに作り話とわかる次の話を記した。

カリブ族の風習は獣のそれです。（中略）鍋に男の首が一つ煮てありました。カリブ族は少年を捕虜にすると、去勢し、成人になるまで働かせ、宴会を催したくなったとき、殺して食べます。（中略）このような少年3人が、わたしたちのもとに逃げて来ました。3人とも男根が切り取られていました。ⁱⁱⁱ

「チャンカ博士がセビリア市会へ宛てた書簡」

コロンブス一行による、このようなおどろおどろしい話しは、魔女狩りの伝統の残る当時のヨーロッパでは、さほどの疑いもなく人々に受け入れられ、大衆の関心事となった。そして、コロンブス以降の探検家たちの、さらなる「武勇伝」が重ねられていった。例えば、ブラジルの先住民集落に滞在したドイツ軍人ハンス・スタデン Hans Staden 1525 -1579が著した『本当の物語』初版1577は、出版社によって「新世界アメリカにある野蛮で、裸で、残酷に人を喰らう人々の国の真実の記述と歴史」と宣伝され、人肉でバーベキューをする裸族の挿絵が添えられたのだ。

また、ブラジルに植民したイエズス会の宣教師たちも、みずからの布教活動の成果として、「かつて行われていた食人が、いかに消滅したか」を積極的に「記録」した。

こうしたカニバリズム像がヨーロッパ世界に広がり、後に、シェークスピアが描く怪物キャリバンや、



ハンス・スタデン『本当の物語』（初版1577）より。ヨーロッパの出版界で活躍した編集者・版画家テアドル・デ・ブライ Théodore de Bry 1528-1598は、コロンブスやハンス・スタデンの冒険譚を、自らが想像した挿絵を入れて出版した。

大人気冒険小説「ロビンソン・クルーソー」のモチーフとなるのであった。

現在となつては、西洋社会との接触以前のアメリカ大陸に、食人の慣習が実際にあったのか、それともなかったのかを明らかにする方法はない。

アメリカの人類学者W. アレンズは、初期の探検家や宣教師の記録には信憑性がないとし、より信憑性のある映像記録や人類学者による民族誌からは、食人の記録が見当たらないことから、「私は今では、社会的に受け入れられた慣習として食人が存在したことは、時代と場所を問わず、なかったのではないかと考えるようになっている」（アレンズ, 1982, p.9）と結論つけている。一方、ブラジルの人類学者エドゥアルド・ヴィヴェイロス・デ・カストロは、初期の探検家や宣教師の食人の記録を事実だという前提をたてたうえで、「食人の慣習の消滅とキリスト教への改宗が同時期に進んだのは、ともに他者をとりこむことにより新たな力を得ることだったからだ」と考察している。

いずれにせよ、コロンブスなどの探検家や初期の宣教師たちは、自らの名誉や正当性のために、食人言説

を巧みに使った。そして、ヨーロッパ社会は、食人に代表される自らがもつ「野蛮」イメージを相手社会に押し付け、その言説を流布・拡大することによって、相手社会に「未開」のレッテルを貼り、相手社会の征服を正当化し、自らの社会を「文明」として位置づけたのである。

文 献

アレンズ W.『人喰いの神話：人類学とカニバリズム』（折島正司訳）岩波書店 1982

エドゥアルド・ヴィヴェイロス・デ・カストロ『インディオの気まぐれな魂』（近藤宏、里見龍樹訳）水声社 2015

ピーター・ヒューム『征服の修辞学 ヨーロッパとカリブ海先住民1492-1797年』（岩尾竜太郎、正木恒夫、本橋哲也訳）法政大学出版局1995

青木康征『完訳 コロンブス航海誌』平凡社 1993

岩尾龍太郎「浮遊する食人種記号：コロンブスの『日記』を読む」『思想』897,pp.59-74 1999

(2016. 1.12 受理)

ⁱ 青木 1993 pp.140-141

ⁱⁱ 青木 1993 p.297

ⁱⁱⁱ 青木 1993 PP.318-319

^{iv} STADEN, 1557